

道南太平洋海域スケトウダラニュース

平成 30 年度 第 1 号 2018 年 9 月 28 日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

函館水産試験場 調査研究部

TEL : 0138-83-2893 FAX : 0138-83-2849

平成 30 年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（1 次調査）結果

函館水試調査船「金星丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2018 年 8 月 28 日～9 月 1 日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深 100～500mの海域

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、昨年同期を下回る。
- ・ 魚群反応の比較的強い海域は、恵山～南茅部沖および登別～白老沖。
- ・ 魚群反応の比較的強い深度は、水深 350m前後。
- ・ 漁獲物は、水深 350m 付近では尾叉長 45～50cm の成魚が主体、水深 250m 付近では尾叉長 40～45cm の成魚に尾叉長 25～35cm の未成魚が混じる。
- ・ 水温は、水深 100～250mにかけて平年よりも高い。

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて観察されましたが、その中でも胆振海域の 179、182 漁区（白老沖）および 192、197 漁区（恵山沖）にはやや強い魚群反応がありました（図 1・2）。
2. 渡島から胆振にかけての平均反応量は、前年同期を下回り、金星丸のよる調査を開始した 2001 年度以降では、2001 年度、2008 年度に次ぐ低い値となりました（図 3）。
3. 魚群反応は、主に水深 200m以深にかけて観察されました。特に水深 350m 前後には比較的強い反応がみられました（図 2・4）。
4. トロール調査の結果、漁獲物の体長組成は、胆振沖（白老沖）の水深 350m 付近では、尾叉長 45～50cm 前後のスケトウダラ成魚が主体となっていました。渡島沖（鹿部沖）の水深 250m 付近では、尾叉長 40～45cm の成魚の比率が高かったものの、尾叉長 25～35cm の未成魚もかなり混じっていました（図 5）。
5. 調査海域の水温は、南茅部沖（D ライン沖観測点）および登別沖（H ライン沖観測点）ともに、水深 100～250m 付近にかけて平年（2002 年度以降の平均値）よりも高くなっていました（2～4℃）。スケトウダラ成魚の生息に好適とされる 5℃以下の水温は、両地点ともおよそ水深 250m 以深となっていました（図 6）。

なお、今回の資源調査の結果は、漁期始め（10～11 月）の状態を予測するために実施しているものです。12 月以降の状況は、11 月下旬に実施する分布調査（2 次調査）により予測する予定です。調査終了後にスケトウダラニュースを発行して、来遊状況等をお知らせします。

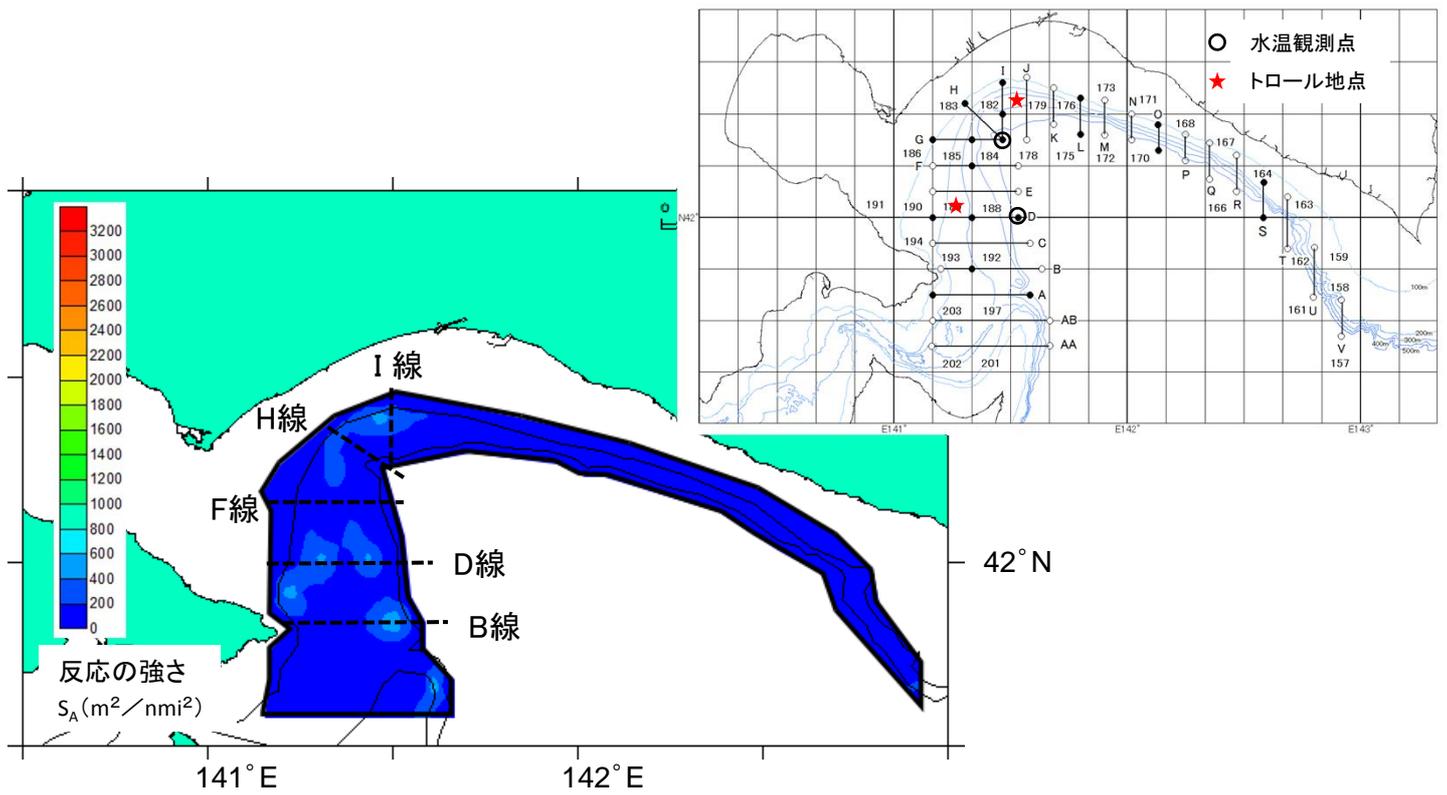


図1 調査海域における魚群の分布(右上図は調査海域図)

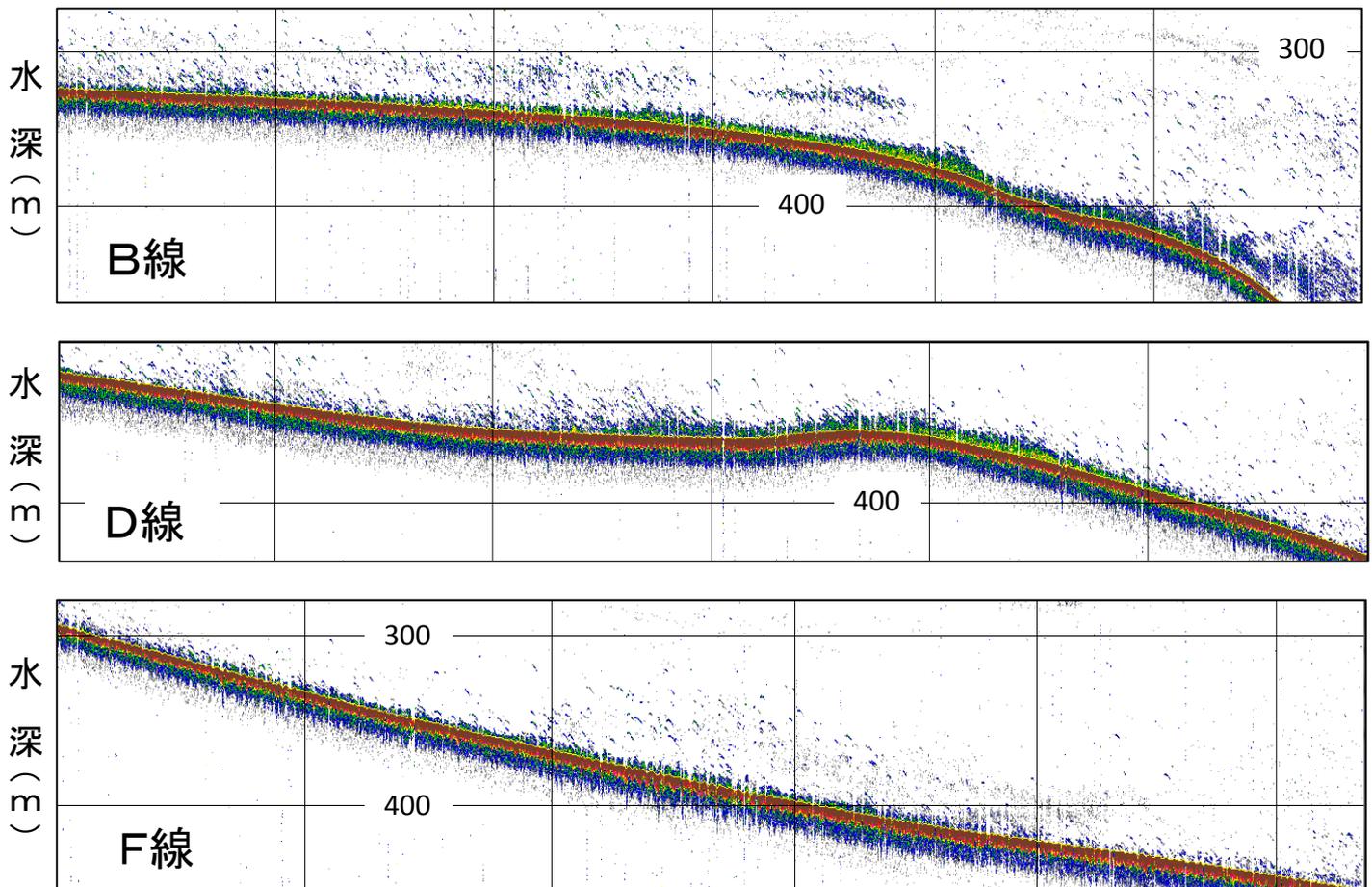


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)
 グラフの水平ラインの間隔は1マイル, 鉛直ラインの間隔は100m

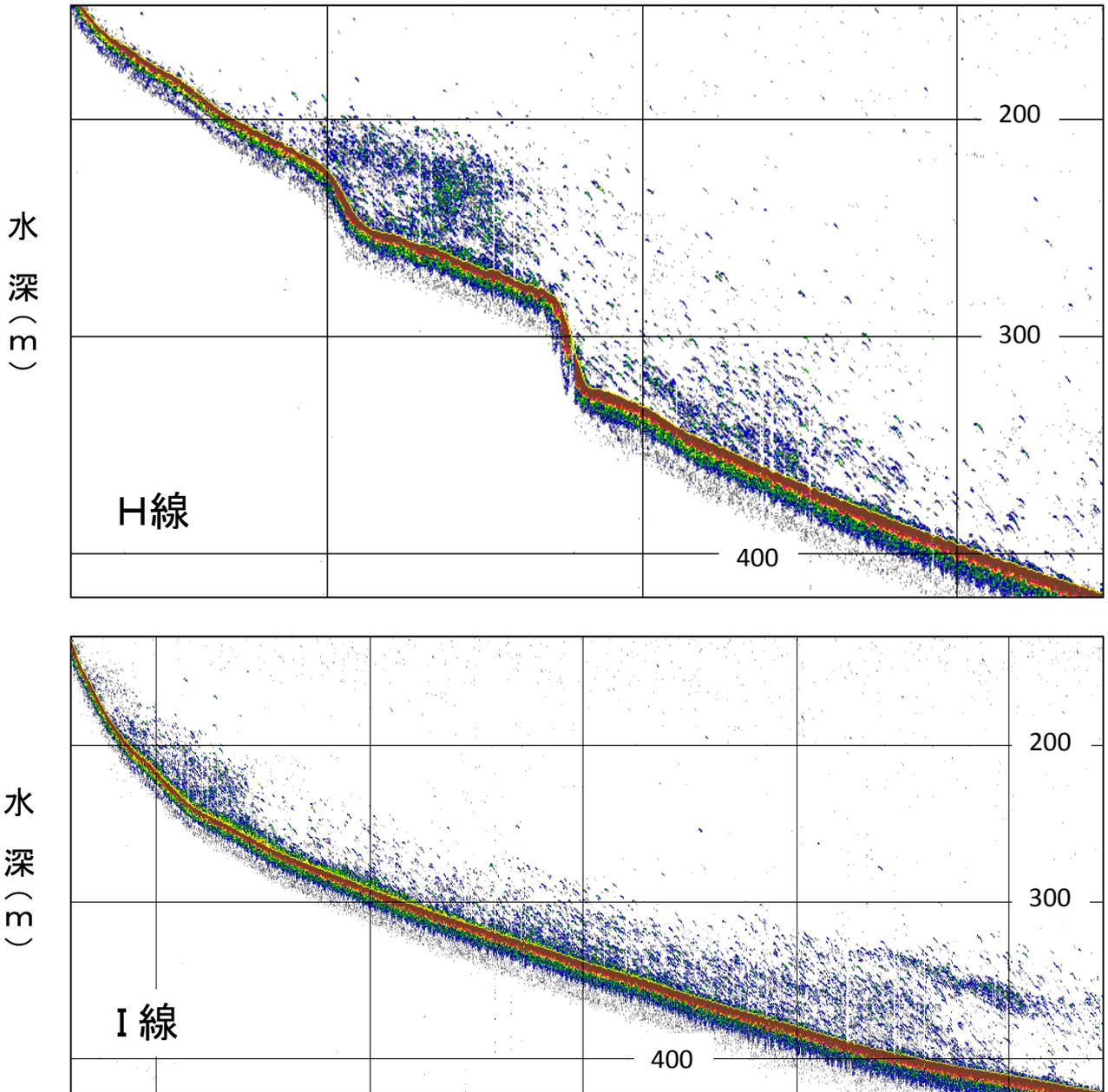


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき
 グラフの水平ラインの間隔は1マイル, 鉛直ラインの間隔は100m

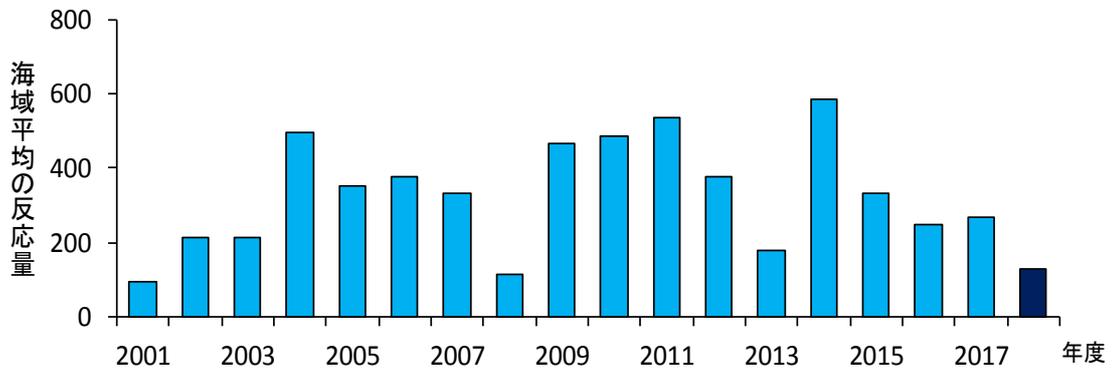


図3 調査海域におけるスケトウダラ魚探反応量の推移

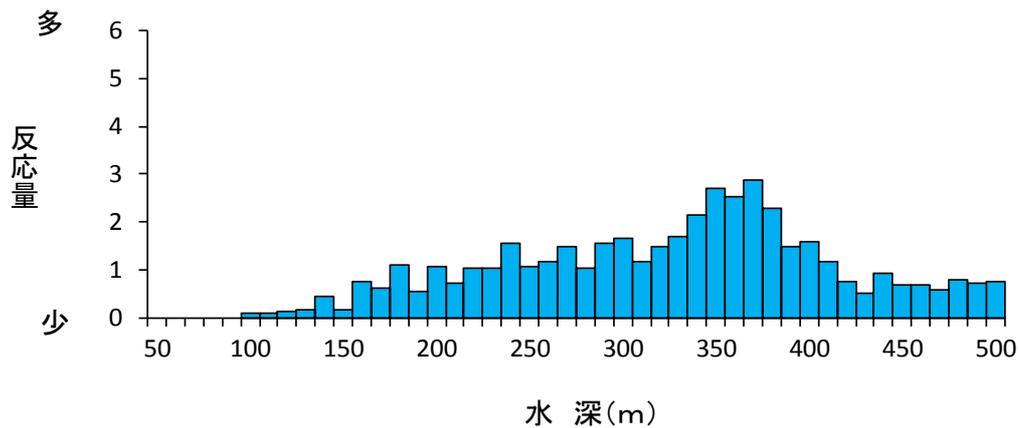


図4 水深別の魚探反応量

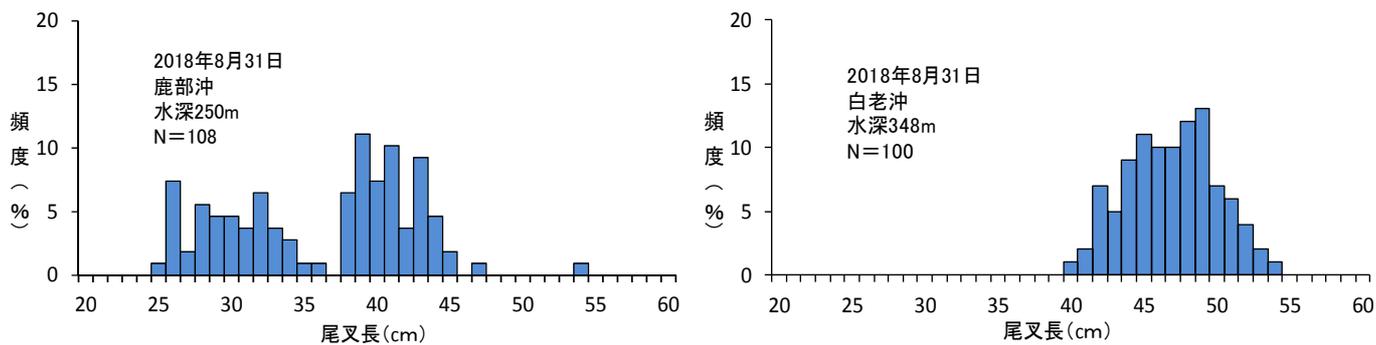


図5 漁獲物の体長組成

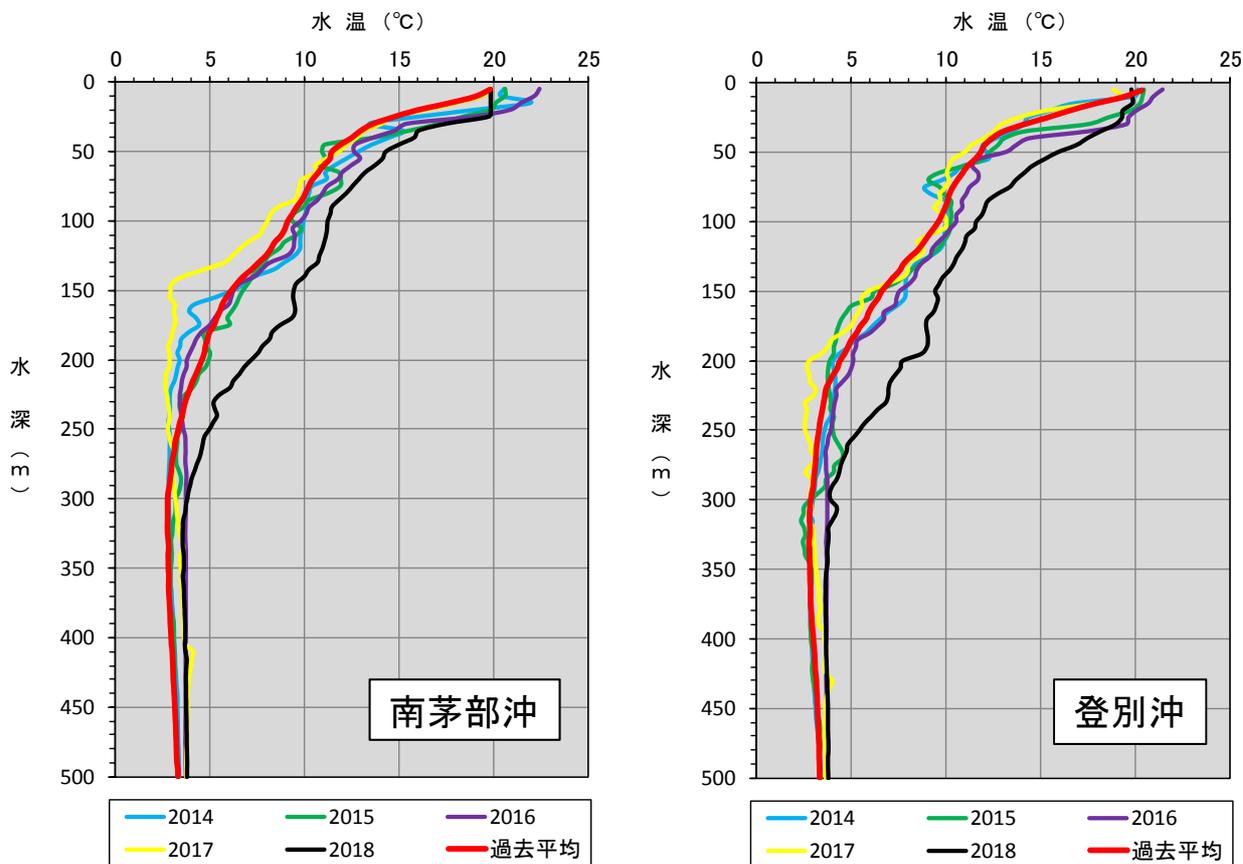


図6 8月下旬における水温の鉛直分布 左:南茅部沖(N42° ライン上), 右:登別沖(Hライン上)
(過去平均:本調査における2002~2017年度のそれぞれの調査点の平均値)